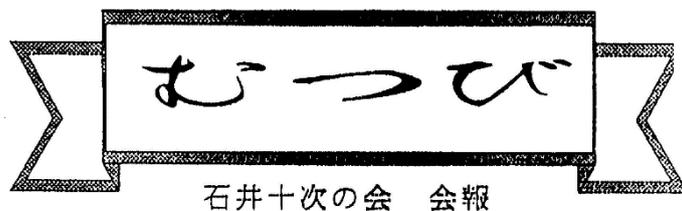


2024年
(令和6年)
7月11日



322号

「人生すべて初体験の連続」

社会福祉法人 栄光園 理事長 江口 敏一

私は、国語や社会に関心がうすく、理工系の道で金属材料開発に携わっておりました。ある時、教会で出会った人との関わりで高齢者福祉に携わることになり、その後、福祉教育、児童福祉へと転身していきました。専門性も一貫性もないものですから、人生は、人との出会い・本との出会い・そして旅した経験から自分の生き方の方向性が与えられるのだなと切に実感しております。

私たちが自分を被造物と考えるなら、造られた方の想いと自分の意志との間で相違があるに違いありません。自分の人生が自分で選べないのはそのせいかとも思っております。福祉の教職を辞し、児童福祉に進む道が紹介された時、知友に転身の価値があるのかと問うと、彼は600余りある児童施設で、子どものための子どもの施設づくりを目指しているのは10もないと言われ、挑戦を勧められました。

2010年から別府の栄光園で、児童福祉に携わることになったのです。私が着任の頃の子どもの養育目標は、「自立」でした。その具体的な内容は、社会資源のサポートを受けながらですが、最低限住む場所と働く場所の確保でした。しかし、どの子も長続きせず挫折してしまうのです。そこで、前向きな人生観・価値観の形成ができるような養育目標が必要ではないかと考えました。

その頃、キリスト教社会福祉学会の編集に携わっていたこともあり、細井勇先生から石井十次研究で著した「石井十次と岡山孤児院」の書籍を譲っていただきました。石井十次の末裔の社会福祉法人石井記念友愛社の理事長児嶋草次郎先生とも出会うことができました。

実際、子どもたちの養育をどのように考え、取り組むのか。また、この仕事に携わっている私たち職員の人生の目標・自己実現に対する取り組みはどうなのか。それら全てをサポートする法人・施設の目標設定と組織をどのように組み立てるのかも課題山積です。他の動物のように子育ては本能ではできないのか、いったい全体人間とは何者なのか、人は誰がどのような目的で造られたと考えればよいのか、身近なところでは虐待が頻発し、世界を見渡すと戦争が絶えないのはなぜか。

次から次に湧いてくる疑問に対し、先駆者、また子どものための子どもの施設づくりをめざしている方たちは、どのような姿勢で取り組み、突き進んでこられたのか考えを巡らしていくと、日本で最初の孤児院の創設者と言われている石井十次と創立の理念を掲げ1世紀近く取り組んでおられる社会福祉法人石井記念友愛社にたどり着かざるを得なかったのです。

石井十次の活躍された時期は、武家社会から明治・大正時代という社会の大変革の時期です。石井十次は育ってこられた高鍋の環境から、これからの社会に役立つと考え、医学を志したのでしょう。その勉学先の岡山で、児童を託されたことから進路が変わります。孤児救済へと足を踏み入れてこられ、その方法についても世界に目を向け、イギリスのバーナードホームやルソーの「エミール」から子育て・施設経営・養育や教育を学ばれたのは周知の事実でしょう。子どもの自立へ向けて成長を支援するには、人格形成の教育が求められます。石井十次が孤児教育を通して、独自の教育法「岡山孤児院 12 則」を定めておられるのは現在の養育にも適用すべきだと思われるものばかりです。実際、人格形成・家庭形成・社会形成は教育のエリアだと言われております。

そして、これらも含め、組織を確かなものへ導くための目標設定・理念・取り組む姿勢、それを構築していく生き方などは、何を大切にし、どのような考えと手法を駆使して子育てができるのか。

ここには学ぶべきことが多すぎます。石井十次のすごさは、助けを必要とする人がいると即座に行動を起こす。集められた 1,200 名の食事一つを考えても、一人 100g のお米で 1 回に 120kg (30kg で 4 袋)、おまけに満腹主義ですから費用の捻出でも大変です。小舎制の取り組みも含め、どのようにして子どもたちの生活を組み立てられたのかと方法論を考えると、その方法に到達した行動原理は詳細な日記などの記録により明らかにされていきます。

石井十次がここに至った「人間存在とは何か」「成長の到達目標をどう考えるか」「それを達成するための姿勢・方針をどのように定めるのか」を切に知りたくになります。まさに、将来を見据えた子どもたちのための子どもの施設づくりでもあるのです。そしてその行く手には自給自足の社会形成があり、他者の支援なしで食の確保が叶うのは心強いであろうこと。実際、自給自足は天災が無い限り継続可能でもある訳ですし石井記念友愛社の施設で生活している子どもたちは、そばに田んぼさえあれば生きていけることを生活の中で実感していると考えられます。

子どもの養育に携わって湧き出てくる疑問に、日本で最初に孤児院を始められた石井十次という人はどのような方で、どのように工夫して、始めたのか。それを、今の社会で継続されている石井記念友愛社の児嶋草次郎さんはどのような仕方で石井十次の遺志を継いで、今日の社会環境の中で展開しておられるのかと関心が尽きません。

そして、その先にどのような福祉社会を構築されようとしているのか、この「むつび」を毎回拝読するたびに、地域に根差して、地域と共に地域の福祉ニーズを満たそうとして歩まれていることがひしひしと伝わります。

これから目指すべき社会は、障害の有無・国籍などの出自に関わらず助け合っていける社会（インクルーシブ社会）が求められています。石井十次だったら、児嶋草次郎だったらどのように考え、行動を起こすのか、期待と共に学び合いながら福祉社会の変革に取り組みたいと思っております。

拙文ながら「むつび」への投稿の機会が与えられ、心から感謝致します

心を揺さぶられた一枚の貼り紙

宮崎支部 田中 実喜雄

私が石井十次の会の活動に参加するきっかけになったのは、その年の初めに「講演会があるので来てみないか」とお誘いを受けたことでした。

当時の私は、息子たちが皆独立し、長年携わってきた PTA 活動や地区自治会のお役目も終え、今の自分にできることは何かを考えている頃でした。しかしながら、私は石井十次という宮崎の偉人のことについては全く存じ上げておらず、ただただ「心に響くワインづくり」のタイトルに惹かれ、ひとつでも学ぶことがあればと参加を申し込みました。講演会では講演者である香月さんの素晴らしいお話はもちろん、会を支える方たちの人柄に触れることができ、私にも何かお手伝いできることがあればと石井十次の会に入会したのです。

その後、この「むつび」を拝見するようになってから、早いもので1年が経ちました。令和5年度は宮崎支部の副支部長という立場をいただき、右も左もわからない状態でしたが、イベントや研修会、「宮崎支部通信」の取材などの活動を通して、楽しく充実した日々を送っていました。そんな活動を楽しむだけの私に大きな変化があったのは、10月にあった会員研修の時です。

初めて参加した会員研修。行きがけのバスは、まるで遠足に行くかのようなワクワクした気持ちでいっぱいでした。研修の訪問先である有隣園に到着し、施設の説明を受けたのち施設内を案内していただいている途中、ふと一枚の貼り紙が目にとまりました。

「笑えー、いいことあるから」

その瞬間、想像の世界でしかありませんが、悲しいことや辛いことをお互いに支えあって乗り越えてきた子どもたちの姿が目につかび、鳥肌が立つような感覚を覚えました。そしてそこで初めて、一人でも多くの子どもたちを守るために、私たち大人が石井十次の信念や想いを広く伝えていくことの大切さを理解し、認識できたのでした。

話しは少し変わりますが、今年の4月に初めて鯉のぼり揚げの行事に参加し、久しぶりに施設の子どもたちを身近に感じる機会がありました。今はまだ施設の子どもたちと触れ合う機会の少ない状況ですが、今後の活動を通して、子どもたちの笑顔を増やすことができたらと思っています。

石井記念友愛社の福祉施設を訪ねて③ ～石井記念こひつじ保育園・前編～

石井記念友愛社10の保育園の一つ「石井記念こひつじ保育園（定員50名）」は、宮崎市の再開発が進む宮崎市広島通りにあります。ここは、柿原政一郎氏が宮崎市長時代及び最晩年の数年を過ごしたゆかりの地です。昭和38年に乳児ホーム「正幸園」として開設されました。平成3年には、石井記念友愛社に移管され「石井記念こひつじ保育園」となりました。子ども達の生き生きと活動している様子は、友愛通信に同封される保育園たより「りぼん」で紹介されています。

現在、49名が在園し、22名の職員が保育に関わっています。0歳「うめ」1歳「もも」2歳「さくら」と年齢別に組み分けされ、3・4・5歳は「たんぼぼ」組として縦割り保育がされています。園舎の玄関に入るとすぐに「茶臼原の森」と表示された部屋があり、中には木の実や枝や落ち葉などを使った造形作品（収穫感謝祭で展示された他園の作品を借りている）や大きな「石井記念友愛社グループマップ」が展示してあります。このマップは、職員が手縫いで刺繍したもので、石井記念友愛社の施設ができるたびに縫い足しているそうです。園舎を囲む石垣は開設された当時のままで、園庭の大きな木は歴史を感じさせ、子ども達の健やかな成長を見守っているようです。

（編集委員 西村 さと子）



職員手縫いの刺繍作品



方舟館からの お知らせ

明治末期、岡山から移築され、石井記念友愛社の敷地内に立つ方舟館。現在は石井十次資料館の案内窓口、また、石井十次の会事務局として使われています。

★新会員のご紹介（敬称略）

【宮崎市】平松寛紀 【都城市】柿木恵子 塚本奈津子 【延岡市】桑山佳子 【国富町】田代智和
【埼玉県】伊藤静雄 【福岡県】伊東正一

★ご寄付をいただきました（敬称略）

【宮崎市】村田れい子 酒匂千昭 齊藤武志 【都城市】本郷貞雄 天水浩毅 【西都市】福田由美
福島律子 【木城町】黒木睦子 小野浩司 【東京都】小林敦子 【滋賀県】奥村須磨子
【長崎県】増田康行

ここまでの掲載者は編集等の都合により6月23日までのものとしています。

★次回の通信発送作業は 8月14日（水）15日（木）いずれも9時からです。

お手伝いいただける方は 0983-32-4612 までお電話ください。

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

〒 884-0102宮崎県児湯郡木城町大字椎木644-1
社会福祉法人 石井記念友愛社後援会
石井十次の会
TEL/FAX 0983-32-4612

編集後記

巻頭は別府市栄光園理事長 江口敏一様に玉稿をいただきました。多忙な日々をお過ごしの中、貴重な原稿をいただき、ありがとうございました。

編集委員 西村さと子